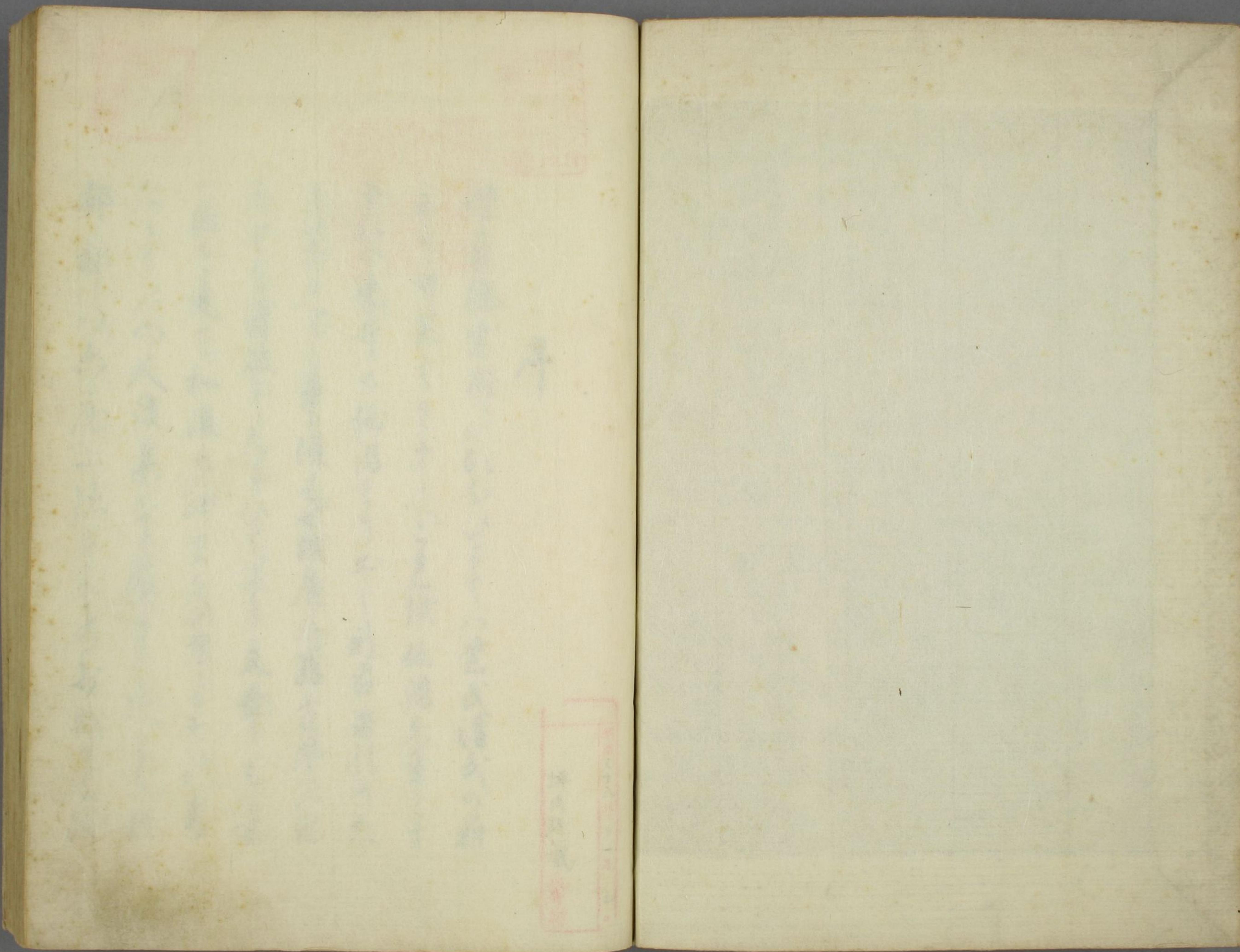


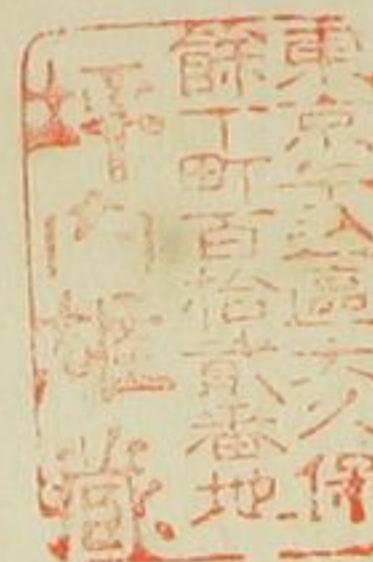
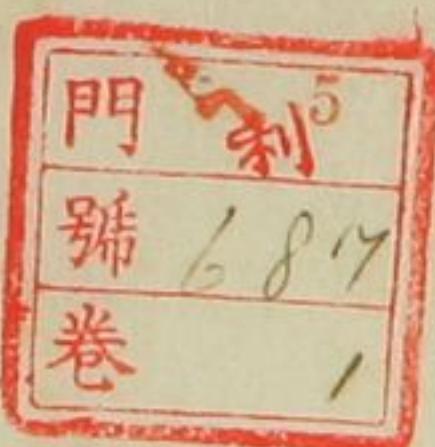


芝蕉翁文集

~ 5
687
1







序

昔貞德宗因はひをひ下の芸氏清氏の雅
可笑しきす。之を汰仇活えまとす
連音の仇活よし生く新古姿まのた
うひるゝ中頃もせ代康の氣古風は徐
もつもを看破したるひとて文章も亦
一松を建て松漢のゆゑをもくらそむ
たるりよつ人後集す。能ひまとも松
都鄙の亟底小隱す。そのがふるん

坪内姫藏氏寄贈
明治二十六年十一月立日

水上亭枕邊法事よりとてあくよ數十篇
をりふる筆芭蕉翁文集と號すうれを
いまとよもめ世人より、同志のくわよ
んきくやくは書を乞ひよほくその
深志を称嘆して雪中庵菴さ筆を
玄唐樓すとあ

芭蕉翁文集と號すうれを

祖翁生涯の句選ありとも拾選行。附合
集ある言すもしき。仇の一巻をいふ
文す御浦をかやうと今於好土此筋
小よつゝゆきハ詔集すらうかうと
活中はもよもとくに消息のあまでたを
語りて一帖ともひとひそみの文章をす
今まち中華の序を乞う申す

家の音煙よもじとももむきは一候ぬ

水上亭

宝曆辛巳冬 桃源

芭蕉翁文集卷一
芭蕉を移す辭 そぞれの幕
葉の東誰よさうんせ、北窓の君よさうん牡丹、
紅白の芝亦よりよくせ草よけうら、荷葉乎
平地ふあくは水清くらも、花さうひいつきの
年よりや極き此境ようりよとれもを伏もと
もともと桂風土もせ伏のひよ叶ひらん教様
茎を偽えそり葉底よまくて庭をときもめ
萱う野鶴もかくももうける人ゆて茅庵の

名もす田友の人ともふおまへて葉をうね根を
つうちて所によ送る事一年こよなん
未み一とみちのくより仰かひひうちと
芭蕉庵すまふ被んとすきい彼の齋の譲よ
化をうえてゆま近き人へよ寝ひ風の
かじかくうすむれまくはづぬさ箇の
すさみよく書かねまくよぬぬ風え
まやときに旅あらしのよあまう人の
それもと紙の色あもとくをぬぬ

詠よ五とせの春秋をよみて二とひもせばア
洞をそぐぐ年み月の半花橋の白ひも
さすがきくはとくの樂ともむりうよ
かちくは松のわうゆるまく四とくわや、
近きくるの芽をほもくしうねけくら
いとけよ割かくせの枝折々安ううよ
芭蕉庵原へあよむひ沈よけくらで
水揚とすすばい富士よ對くも紫門京を
きくすまう御江の船こつまくの淀よ

すと夜の月をとむ候りよろしくは初月の
夕より雪をいとひるをうすも尼月み
よそあひふとまつもとれをうのすせの葉
もううく琴をあくすたまう或ひ半
空折て風鳥の尾をいとくま麻破きそ
風をかむる花咲ともばがやうなみ
茎をせきとも斧よ行くかの山中不材の
おあよぎつまむはる一信信素ハ是よ
幸ちけりうら浪横渠ハ新葉を見

修學の力とせりとより予そのあゝのを
やうく只此信よ挂ひそ風雨りゆふき
やすとをやうするは

紫門辯

立之成翁

去年の秋からそぞく画を今をとま五月乃
けりゆかに切ふ引きをせしめりれよみう
みう一日竹扇をわざと次日用詮をあす
そめ急流をうこ風雅をあます予こうふ

とふ事の風流は物の多よ、おもや風流の多よ
みといえま風流の物の多よ、書すや画の多め
書すと、うそも書す、書二つにて用をあす
ゆもとつからまちや君子、多能を承と
いえど、呂二つとも用一するゆ感すへま
すか画へとつて手うはと、風流へとんで
手う赤子ともされども、あつ画の精神徹小
入て筆端ぬきぬよ、筆走をす。とくろ
手うる石すあひて手う風流の妻炉を磨

おとし元よさうひて用ふふす、嘸秋の西行
の詞は、假初小ひちゆきとあくあらあと
あきこもひとす、まよへ後もね上皇の
書と、うみひと、まよもたまよ、奇よ、美有
志も、おひとを添ふと、おひと、ゆうじと、
られ、おひとを添ふと、おひと、ゆうじと、
たとうううううううううううううううう
そんじ古人のりとめぞる所をりとめよと
お山大師は筆ひとすも、えう風流も

まくあはかあ／とひを行をさけ
まつ外ふあくまつりの

信傳吟勝別の詞

ちせや翁

杖の底よ草鞋をうけて笠の内よ名をうる
の元禄六とぞ詠まつむ信も吟武江の
東源川の茅庵を安て既よ一步をばくも
と書くこむ信常ふ風情をみ市と遊て
年、牛萩り御の舟とあると、又伊勢

熊豊ふ漁人とす君へきかの鷦不い／＼
流よよ蓑をすれ千尋の置よ廻をう／＼
歌ふ伏喜ふ漁人約半は蓑いさだよ／＼
舟の立／＼をなすす／＼今この列よ重よ／＼
ともか岸上よ立／＼箱根山もる／＼見や／＼
波白きのたもる／＼木々松林の峰嶺ゆう
／＼れちまく／＼し／＼君の／＼首と／＼
らき／＼えよおまく／＼み岸上よ立／＼と云て
被をわづちぬ

鶴の毛ひよひよひよひよひよひよひよひよ

月見賊

翁

おとし 能登湖の月夜んとく新しく本音もよ
瑞麻にて宿所松本のアハ宿屋ふ乙列
酒を携く泉川よりまめ名とほく山秀へ葉を
色う佳樂よ一木の多を覺えずき音ハ葉と
ひ酒といひかづのくわニ酒よつれ前據
酒堂ハ竹よかくゆきそその葉ふ玉川の

奇を詠へ支那、月ようくまくまを酒よ
樂天う詩を吟す支考の若く本筋ハもぬ
智月へりのえ未をよかつてのらぬのもまう
かひなじゆき年よも惟也法師、酒よ
かくもく葉ノ威、やもしもしきくもえふ
風吹て音すニ子若の志とさきらんや
まくまくかの左とすノも歌く洋くの
うあけとあねの都と歌中ハ仙の持ひ
をん津やつれの法ゆふあくろき

活うるぬあらひへかゝる日えの続をと
かりゆまのまつ尾ようれせのかろ風
ねをつゝそよ

朱の筆をもつての日記

かくして盃の舟よ寄りて波水の舟よ舟と
浮くんとわざりし人ふ風情をそぞりよ枝よ
歌子の唐子ハなけきとも扇子茶瓶のうち
男あわ、赤壁の舟のとくよ、うきよ、うきら
ゆきよ、はやお出で、涼のちよあは、涼の

山もこもよけぬひ日枝、横川の松
つゝうき比定のる根、厚をむかへづく
うづくかきわの草、まく石山の峰、
津の峰よさづくおこす根株の森も悉
めん矢桔の帰帆、えぐをもてますよ
ひまつ

名月や初水よ清々七小町

伊を寫
唐國の
楳居士、西湖
哉

女の粧ひをまく、川の風雅の名すけと
きのまやうよほさんや実そも和漢の
名派有けり。さて松本よ船をさへきて
菴店の様子ふをそぞめて、曰へよ
菴葉は水を湛て、身は葉茎のあよう
か竹の林の酒も、さとりやあくら、古き
き育たるをや様へかくはの名酒
み、辛崎の松も、さとりやあくら、古き
都の名むゆり、今か、尾花川の葉がのと

とすす那尚白をかき、あひるや
み更よとねア

二井ものつむぎやまの月

深ふ枝放のむり、あくまよき育の藤を
あり、ハ此、度よ轉愈う文素をもひむき
賣鳴う詩族をもりとおぬま詩人を家よ
とく、くふはたと、赤壁のあはとつよ
え北よけんをもくみやとくめりうこうと
おもよとくを今育の風流をあくまく

やうふ日ハ長安山のおはるよ入る

既望賊

壬月廿六日息梓サシハニ育ハニニモア
イミカクホム船を里田の浦ヨリモミ日モ
黄昏計船ノシ人何某成美トシ人のお
の身ニ漕入リテ醉翁松乃日ヨウルホテ
あるあるあまと舟の中トシヨリモヨ
リテハカリヒクナガスカムキヨウルヒモ

簾毛先薙を拂フヨその後園ふ茅行
ゆけ行て絆船の切目たゞぬウルアヘ
やうて岸上ノ招をなシテ送をみてナガ
いさよしのあと候す日ハ待ヤシムケル
生え柳ともすす懸ワタカシトマヌ仲秋
モの日ハ月の浮え當ヨウキを燒山ト
ソナリヨニシヒ松を引くをテ
かの堂上ヲ摘テハシミハニ上水蓋ハたる
よりハクシの向よ十二峰の影をもくす

とうくつりて毎日も三年もしてあそきのうちふ
隠とふれひつまう流域とよみとつうす
さとくあやの鳥をみてかく そろ
かるうそとあをりてむきをくいくわ
がくせんとまほのをとげうるわくわゆ
玉塔の歌をうたてあはな千軒佛の
うそをほほ説やいそよひのをせのゆ
うけてかくくはのあきらめこと京極
苦つの歌あひの詞をうたふふへこよひも

此堂よおそ二ましゑを信頼のうもを
うもす云事訳志のたよひがくひやと
よすかくは身よおそまゐる事とあと
さへ身を帰さんやともとの岸上よ風を
吹くれば月は横川のかまくまで始種城の
達もあゆう

内閣説

かきか

色ハ君子のふくもふくと佛も五戒の初より
まことしやく法によびて此情のわすふくよ
るありうるわいうす人志をぬく
ぬくふの柄おトクよらひの外のうひ
あそてちふの是の人めは毎も見る人あく
いからあやまちを仕出さんらゐの子の波
の花よ神志もれくあきつて身とうか
たゞむ多うときの身みゆきともの

苏生のキよ魂をうりやく物の病とつま
さるよハ遠ふまく墨山下りぬく人せ七十を
稀きうとく身の聲なると、もうふ二十
余年をうけられたのをひまよどひつての
身のこゝ六十年六十年よどひつての
うりあきうとく身がれく育麻うちか教
紀一書る麻覚の小引行事とうもざる
あらうなるのい思ふ事多く煩惱增長
一書するものい是れのすまうもの

ふをもてせりいとあくよろく、意欲の魔界
ひととて、済ぬふかほきまつすゆうじゆ
あ義を仙の順利害を破却へももを
わすれど、宋よあんらむをりひがこと、
ソノ人あれは、妄用の毎ひう出て、化の
お業とけまくらまう、も殺つてと罵で
杜立吉うそはるさんよ、あうととあくと、實績を
あうとと、み十年の頑丈自書、川
禁戒とす

お魚の豆ハ端からよつて、め垣

お魚拂の談

木主め

喰ひ豆よりおのじく、もする、身と拂あら
「豆よ、あきはなら日拂拂のこよしけりやモ
牛の儀式丸事の儀法、が例有ることて、嘸あし
の人の様拂拂ともいと面おけき名の、あも魯
は一弓も屢風よからぬか、片拂の葉令とうけて
拂う怪子の上浪底されえまつる墨筆もいとまく

冬の日朝ひとすへとすよ御の庭の渴潤度とも
立ちてすゆ中おねにのうしろ向ふと同よ、
立あれおのまは破き笑ひ子はトモ取るは
何をもとめりとらす一味皆とゆる大男の袋
うす善きもとめりとらすお挂のサンサつて組
板志け羽絨拂つてたけ山主意あと笑の意り
もすづかうかうもの語居並つて花おも葉うく
る解といあづぬ

殊様や草引者のみ

幻住庵記

石山の奥岩間は山山あも國ふじと云其の
かこもか寺の名を傳ふあづて拂よ御玉流を
流すと翠微堂す立す年ニ也二百歩うそ
ハ幡宮立す神社ハ深泥の苦像とうや
壁一つあよ、忌めることあるがれとわざ
利益の夢を因りあらず又年一日本ノ人の
詔うけいと神をね靜する傍ナ
住持ノ家ノ戸口と蓬根毬引をかこて危根

もま壁前で狐狸同変をゆる幻燈庵と云
何よは傍何事ハ勇士菱沼氏曲水子の伯父
みすんゆと今ハ八年斗昔よ成て幻燈庵
の名をゆきゆけり予又市中を走り十年
けつまつてみ十年也近き者ハ養虫の巣
きうかひ地牛のあそをめぐらし奥羽象潟
の巣を日よ面をあくらむかすあゆくに記
北陸の巣破よとひすを破りて年数多の
波よたよひ鳴の厚巣の流ととまるか

芦の一もの法身よりへ行路ゆきゆくめ
垣根法席あそびる御月はけりやく板をあふ
入へるの板をかくらひそくねますうよ
志の名ゆきゆく御端坐す山藤松す
うつゆけもあつまつてくともいとくなど
そろふ鳥を魂是楚東南ふげく沙ハ
浦湘洞庭よ立山ハ未申よそくも人あよれ
かよふ鳥立山高峰峰よりさく沙風拂

もくもほく日枝のと改石のる根より 午
崎うねへあらうてはあも松あり湯をく
舟あり笠取よ画よ本懸のすす林の小田よ
早苗うる噴雲えふ夕雲のすよ水窮う
たくち美京あくとあくととすすあ
やかも三上山ハ士岐の傍よかひて或義村の
古木樫もありひ生き田上山よ古きかき
毎生ケ嶽千丈う峰禱越より山竹玉津
の里ハいとよく花木を継代あるととけん

万葉集の姿なりけり桜吹雪に陽かくさんと
後の峰よ遠きうねの松つま葉の多生をみて
猿は猿掛と名づけ海棠よ葉と當ひ主簿
峰よ庵を法する王慈除餘う徒よひあくひ唯
朧寐山民と来て巖前よ足を投却一室山よ
風を拂ひ度す遙かさかがの附ハ谷の清水を
汲みえくわくとくのやと傳て一徳の
徳いとくわくばく昔は今人の津よひすく
徳あく徳うて云いかけるぬれもす 持佛

一間を隔て表れとせよおもじつておかといまゝ
あつてのよしむを筑紫のむち山の傍山へ加茂
は甲斐何まう嚴みめくらしひ活よはわ
ソヨウケリをりくきく家をもふいと
やすくとそひそりて幻住庵の二家と稱る
がくゆ山房の記念よなねおる山房とひ候
病くとひる乞角くとくものあらう
桜堂故の苔蓑はうき松のうろ桜よ掛く
宣ハナレ
訪ふくよをも勤くある

官守の森里のたのとも入あらるのあらの
鶴
元の豆細すゑあくまぢやく
農淡日既よ山の煙りかきハ夜坐若山の
月を絶え、新きははひ打き落すの岡面よ是誰
モテテサリシえ、とぞもひふる閑寂をあらの
山跡ふりとさかくさんとす、あらひや、病
身人よ倦きて世をいづり人よ似くつ
年月のうつむか、杜ミガの科をあらす
或時仕官愈余の地をうすまこと一度ハ佛爺

祖宮の廟より入るんとさも何んか風きよ
月をとら花を小指を常にて鶴と天涯のもう
まくまくすみは終よ云能事あつて此一筋よ
ちかる樂天の五脇の神をナア老社も
疲れり賀恩文質のひとうわらもいり
まうかは極なりやとありひ捨てうぬ

先きのもむねのあもあう度ある

十八樓記

姜濬の國をかほ川よせきよ水橋り亭を
加島氏と云稲葉の後すまく山たるよモイミ
近づすをかほ田中のまハ松の一ひよ庵
名よ添え民あい木のかこせみとくもゆ
懸布すよ門をとて右よ清流深よ里人
行ひしあけく漁村舟を並べ細きもゆ船を
きく已うきぬ只この橋をもてますよ
仰うすまくふ度の日も忘うり入日の事

日よかくまで涼よしすりと毎火の事すす
きくも櫛のもとで移銅するがと津よ同さぬ
れえものあくらへかの浦瀬の八つの泳や
西瀬の十の城も涼風一味はうちよらひとあ
あうりけ橋よ石をそんとすへ十八橋
とよしまやれとおだ

たりのと同えゆゑとあまの涼

十八橋

紙食法記

古き枕ふる食舎の貴妃うかきこまく侍つて赤と
ひ哀傷とす御席のあらそひのうめで、
駕幸をぬひりつてぬきの趙よ後り世を
からむ彼のそり膚よをくも白ひたま止まん
もやゑの一ねとせんもつもくとくいとやこの
波のふすぬい赤よもあくら云常に行ひます
駕う名あひきとひ波のそめよりいとせんを
ありひと生羽の周巻上とくとくある人

つゝもぬをたゞかへ 越後の角へ破城亭の
まゝあへよハ二千里の川河をかへ一遠
むづのあさのりよハ轟ふるの音
くすきすく 空へ風て脊中よ直ひ二百余
里の候難をわざうほよハ吹きふくとえがき
大坂の扇よいゝる様もひの徳とつまき氣の
怪きやうとあはれとおどり氣のふりくわね
くわくし

嵯峨日記

元禄乙亥年未卯月十八日源藏子遊ひて去来り
落柿舎より元兆よりまつて草木にて京よ
帰る所ハ松鷹山よりすこぞ隣子つて
岸川をくぐる金牛の尾渴一るも下休是不
トトキシ

机一硯文庫白文章

本朝乙亥首世後お源流氏お治土佐日記松
葉集を庭唐の舟檻ちるみをひらひよさるの

菜の花を豊名庵一晩在添あり余潤菜の
あとも京より故郷へ戻かぬが實徳を
思ふ清室年中も

十九日午ま餘川もよ詣大井川前より水
巻じちよまス松の尾の里よつて虚庵よ
詣る人被りひきス松の林のすよ小鶴庵スと
云ひ故く上下の暖家よニ不有いつきう角う
すらん彼仲もうぬくめく所ス約略の様
とよけあくふゆれハ鷺井よよりミツの巻ハ

三月の晴萩の内よ行る者すふ桜を植ス
かこゝも湯浦後壁ス上よ起外スと 清平
義中は慶芳とあまく照天村の柳巫女廟ス
花のじつもありひスあ

うれすや行の子スかう人の果

巻じちよまス萩の底りや風のすら

斜日ふみく萩柿全よゆる北京より来る
おまえよゆる育より外

六十日北岩峰の木なんと羽衣尼あるおまえ

中の身とぞかる

つまむよ子とのちや麦畠

爲柿全の昔より作る傳うて家へ頽破す
中より化りみるきもつるのとくとくと
まれ形を染画る壁も風よ破きゑよぬか
奇石怪木も簾の下よかくらる竹桶のみ
袖のみ一本花芳しけき

袖のとやもう一人料理の用

子祝大升 紙をともる日衣

まやん度多すらうる源流のふ 尼羽紅

去ま兄の宅より菜子調葉のわから送り乍
ハ羽紅主婦ととめく妙庵一法よりへまく
外さきへあせりぬきてあはれりうか
起止と豆の菜子をかく店先へ曉をとむと
ひす去年の夏元兆う宅よりうなぎの板庖
よほどの人外へうかへ事にうへて夏も又
云種と書換するところもかとえりと笑ひぬれ
羽紅尼北京よりおまえ未だうまる

二十一日廿九日さうなればもしやうへとおれ
しのゆよ沙野船よううちうつてあやう
吉信は往日眠れと言ふがよひとおまえ年半
帰るとおはんもすく意外またかあらぬと
ぬちふ初仕店めておまえを放き手出で
歎み清ちま

二十二日釣りる西津らるいもくまく
あふもくちくねよま云
来よ居りれ、此と所すと

酒きのむあり、ホミトウ
愁よほり、愁きあ
喪
寝よ居り、もひ憲きあ
佛、はかく、うかまと西上人
よこゆる、佛、さを行つまつま
まかふ

山里よこまき、浪をよこむ
独さんとありひくよめ

独すじやく西かき、長浦源士の曰家ハ

半日の雨を経て、主へはまたの雨をうなぎ
素嘗びを尋ね、常は晴天をもつて

うれみを沸かすとかへこそ
とほりきよもとう居て、いわる

音楽もあとう消息有てあう武江よりゆ
傳ひとも朋友の人の消息ともかまく居て、
中よせあはすよ手うに持て芭蕉の田舎事で
宗波よきよ

もう往小鴻送りすされま

宗波よきよ

おすすから枝二張りうつて机へかへ
まきききがんばとく

萬葉茶色よなましむく

風雪うそ

狗脊の茎よゑゑゑ巣うね
出代や初代よもじう

二十日

おきすかあ塊よむの月
麦のあやあ塊よむの月

竹の子や幼き時の経験すと
麦は穂や穂よをみて鳴き雀
一日の麦の穂よをかく雀
能うるの時一分をも

二十四日

頬蕊柿舍

豆植る畝も未耕畝も名ふう跡

元兆

芋よやしきと来京する事

昭所昌房より消息

大津尚白より消息ある
凡兆来る堅田幸福寺

訪于其伯

凡兆京中歸る

丈五日

千那大はよ帰る

史邦丈革之坊

頬蕊柿舍

對溪啄峰伴鳥叟耽荒森仙野人居

枝改今欠赤丸印者篆分氏懷學書

尋小督墳

強核怨情生淺言一論故日歸村風昔季
僅得求琴韵何支孤墳井樹中

茅山よりニ至る所の林の実

丈竹

遠中吟

杜宇啼や桜ノ柄さう
杜門不見向陳玄已對客揮箋梨か漁
乙がまうてまじのはうかひよ船の市 仇諧

一毛も角よ

カヌ半俗の膏葉入ハふとろよ
印井峰を馬子かこく 其角
狹の巣 よねするの内
せむより流人よ後す小石一つ 其角
字はのひ女よあらを傳て承る
傳すきりく ゆきす 結を 其角
申の附ゆる雪處を津毫萬字を云ひ
せむ津毫あらかじものと 小毛い葉栗

古六日

芳出よしニ葉はよ見る柿柿の実み文草
烟えんの葉はかくむ御ごのももセ紙
地牛ぢうおあけふき角振かくふてと去來
人ひともじうら湯瓶ゆびんまつてて丈じやう
有あり三度さんど花御はなごりやんりやんヒ列

古七日

人ひと不ふ来らい旅りょ日ひ詔せう

古八日
差さよ社國しゃくにの事ことを立たて生うてて防ぼう活かつてて見みる乞これ
あるはは差さよを立たてすす候まてて火ひを少すくなりり帰か
ろろひひをを差さよる光ひかりを含いん附つきてて花はなを
少すくなりり常じょうを立たて候ますす候ま、蛇へびを差さよるととう
睡ね枕まくら記き有あるも槐安國けいあんこく莊周じょうしゆく差さよよめめ
めめをを差さよよが差さよよの聖人せいじん君きみ子こよよああくく
游ゆ忘わう忠ちゆうぶぶれれのの也や差さよよめめ然ぜん了りよう諦だつ
ひひき葉はを差さよよとと不ふ得とく急きき差さよよ我わ乎う

志源^{シヨウ}伊湯田里^{イダリ}まであらひあてあハ麻を
ゆく紀外^{キエイ}乃所^{ノシ}の音をとみか^{ミカ}百日う
かとおのとく伊^イ片^ヒ取^{ハシ}離^{ハシ}きて 何^{ハシ}
あも^{ハシ}或^{ハシ}ハ吉^{ハシ}裏^{ハシ}よ深^{ハシ}て わす^{ハシ}キ
かけ^{ハシ}ひぬ^{ハシ}え^{ハシ}え^{ハシ}又^{ハシ}な^{ハシ}と^{ハシ}あ^{ハシ}

古九日

又音奥^{シオ}か^シ言^シ館^{カニ}の詩^シえ^シ

高^{タカ}館^{カニ}聳^{タマ}天^{スカイ}星^{スカイ}似^シ冒^{モウ}夜^{ナイト}川^{カワ}通^{スル}海^{シマ}月^{ムーン}如^クう^ク其^シ地^ジ

風^{ウインド}京^キ所以^{シテ}不^ハ叶^ハ古^{コト}人^{ヒト}不^ハ至^ハ其^シ比^ヒ時^ヒ以^ハ不^ハ叶^ハ

其^シ京^キ

朔^{シキ}日^ヒ

江^カ門^モ平^{ヒラ}田^タ明^{アキ}昌^カ幸^カ李^リ由^ユ尚^カ白^カ千^チ那^ナ消^{ハシ}息^{ハシ}

サ^カの^カ子^カや^カ喰^{ハシ}沙^カレ^カリ^カ族^カの^カ李^リ由^ユ

この^カは^カ肌^カ若^カ才^カよ^カつ^カ御^カ日^カ 尚^カ白^カ

還^カ岐^カ

ま^カふ^カる^カ日^カも^カく^カ 箕^カ輪^カ 全^カ

二^カ日^ヒ

首^カぬ^カあ^カう^カ芳^カ野^カの^カ花^カを^カう^カの^カ熊^カね^カよ^カり^カて

修了

武江田次の人の疋波是志とて後
熊野治やかつ入之の内

大峰やすらぎ奥を花の果

夕湯よかとて大井川船を宿て扇子涼す
さ戸難波をむる而津生て水よ及くゆ

二日

此處の船宿つゝ事渡り渡船止ひ尚其の
武江の事とも回憶既よあれ

四日

育よ麻うり今も外よ渡り外宣よ。而津
止じぬ日ハ萬柿金を出んよと名あきく
けまハ奥口のへゑへゑをえどりて
み月あや毛馬角をすむ壁のぬ

伊賀新大佛の記

伊賀の國阿波の尼寺新大佛とて有げてハ
宗家の大寺の聖俊宗上人の因縁あり

あくへ舊事年を尋て旧友宗七家にいり
かきまわるひりおと彼比よりまゝ仁王の樟樹の
路の枯木のまのそらは暖かくねりいゝて宿
石居すあれりありてと云ひんむかるまゐよ
仙人様を入りて芝花を移ふのせんとち
いやう若のぬをあさう声伴ひあくへある岩室よ
たうちかくおみけ若よせきてりのりよとも
きよみゆうゆうひいきくほりゆもかく上人の
古歌をひきめすう草堂のかくふ安里

あくへ誅よからむ人の力をつぶす上人の
考取へひまづすかく傳ふとすう御く
洞も底も透りあくもかくく石をよぬく
つまづく

丈より湯をまく石の上

芭蕉翁文集卷二

甲子吟行

千里小旅亭
宿宿をつます
三更月ト玄何
入とひそん昔は人の林よすうきて
貞享甲子
秋八月江上の波底を生るかと
風の音うきうき
さもけよ

跡まくをかよ風の先もあつる
秋才とくづりて波底をさす故々

寒詠る日のあ津て山され雲よほきけよ

音はあふきをえぬ日もありうき

何某チリといひるハ此度政の助とあてようの
いふくひをつうゆの事よ莫連の文ふく

朋友信あるうむび人

源川や毛豆を富士よおけり チリ

富士川の水とくを引よニツギなり捨子の義
けみ泣あまけ川の早瀬よりけさ泣せの波と
志水くよ涙のあけば命すりまた捨豆さん
小森うりとみ秋乃風を育やちさんあすや

志水さんと袂よし答えよおけて色よ

猿を支人持ふ秋乃風いくふ

いづめくやめ又よほくあれうるうかようくまれ
ゑるう父ハ汝をあもよあく母ハめをうともよ
行く只是天うそ汝う性のつれぬふかげ

大井川ニゆる日ハ渡日西津けり

秋日清風江ノ持わん大井川 チリ

眼前

午夜の邊は本檜ハ馬よ嘗見り

二十日から月の日がすくふるて山の根をいと
くさよ馬上よもちをもれて奴里、まく鶴鳴
をく杜牧うおれの沙爰小舟の中よも
てあちあちかくろく

馬よ急て沙爰日を一葉の煙

松葉庵風瀑り伊勢よ有りを尋ねて十日
沙爰足を止むるをか宮よ清て修了するよ
一の名店の宿かはく、古煙町よええて
上すかき峰の松風よめももうくぬう

乞を記すて、
みそくらかくそくの松を抱く風

獨聞ふ才識を不常禮よ一意を樹てひよ十八
殊を携信手以て慶あく信手以て聲かく我
信よあらかじてとも聲あたまのハ清居の属よたえ
く神かよ入をえさば

西行翁の書よ處もあり女との芋あくふを
えふふ

芋あくふ西行翁の書ふん

き日のうちにある菴、店を立ち、うふてうと云
うる女に名ふ奈うせよと云ふ白を結出
けまふ書付候。

菴のあや様の趣すとれり

室人の芳舎をとひや

葛被を付四五枚のうへる

長日のはじめ放々ゆゆく北堂の萱草もお枯
葉く今、ぬかく何事も昔つかうてはく
かの聲かく肩皺ある唯余有ることのうて

玄葉がふきかたのうむち聲をやどれて女の衣
拂めよ浦島の子はむく若狭の肩わせ、きくと
おはくをきく

年少く、消人間をうけ、秋の衣

大和の國より仰して葛の歌付の内と云ふよ
くるけふハ例のクリク田里かねい日はとまりて
是を体じ寝より起ふあい

あらや除惡よもくとも付の衣

二上山あ麻子よ清て庭上の松をえまくらん

千とせも泣くるかん大いに牛を危すとひ
死んかと悲情といえども佛縁よもやかく斧竹の
罪体すみれとて幸うて

僧船がいく死きる法のまゝ

独り舟船ふあくけまく津よ山ゆく白雲
葦ふすく烟雨谷をほんと山城のあくよ
ちいさく西よあを伏考東よ寫三院の達の
ちの底よ音よ音ようせ山よ入て世を忘れ
きる人の多くい詠よはうき奇ふうくいとや

唐土の庵山といそんもまくもへゑひや

或坊よ一帆をかまく

砧あくつまく室をよ坊り妻

西上人の学は居の所ハ奥の院より右の二町
才とけ入院宋人の筆よ毛のひりよ有
さうれ谷を隔ていとす。彼とくの清
秀昔ようくのスツキもとくとあく
翁ける

家とくくこうよはせずくわ

乃是桂家よ伯夷あるかあひ口を
すゝん

之は許由よ告も耳をうるん
山を登り松を下る秋の日既に斜よあれハ
名あるふく乃ち先後醍醐帝の山陵
を洋む

高廟年を渡てたゞ何を也と
大和より山妹を渡す多江院よ入へ高廟よ
むすみにまも山中をもとめし者豈り

極あり併若のま武うひ多義終底よ似度有
枯風と、い川きのふう似ううえんがもまく
秋湖のあら小竹と、秋の風

不破

枯風や義子細も不破の年
大和よ泊まけるおは本因うみとうとす武能
ちゆく付時さくとをもよありひ孫立けと
死もとぬ孫孫のとよ松の音

東石車道家

多牡丹多色よ おはなとおは

多まつらの風行くもとわのうれゆは

うへ出る

八重ひや白裏をます 一さ

熱田より

社殿大年祇園祭地、御事とまじよ院の
かくよ運とくとも小社の山をあす 宮よ
石を磨き其の神と名けた蓬生とよもろの
あまむらをなり よりを度よも ひ乃

とあづける

志津と桔く候す やくわ

、名後尾よ入るたのやく 開琴す

紀の風の音、牛糞よ似くる
羊れ太もするもとおうす

雪えよりうまく

市人よひ茎葉す 雪の傘

捨人そ見る

馬をさしゆる者の方へへ

浦邊の日暮にて

海うねる船の音やのうふ

家よつゝとれかよ木を捨て旅床ある

小年の音けき

年くわぬ筆毫て筆耕もむらう

としも山あよくを誠て

詠う算を嘗坐よ候せぬの年

まよよ出たるや

まよふや夜すがき山の終焉

仲夏二月堂より見りて
水多や沙の傍は當の處
京よやうに三井松風う畠邊の山あを写

梅林

梅の花や雪を盛あれ

桜のあは花よかまくぬすくゑ

伏見西岸も住口上人よ遠ふて

我病よ伏えの枕のやまとよ

大津よ土を山河を越す

山路あひ行せりやう 莖叶

ぬきぬす

辛崎の松もよし勝手

豆の傳ひとて旅店よ勝をうけ
つし事とまほ千鶴さん 女

吟歌

幕細は花見ある花うめ

水口かく二十年を経てがくよあ

余二つ中よ活るさくわ

伊豆の國むかう小島の奈つまも去年の秋ふ
り御しむふか石をすましまつねうそ
れすと尾張のもと詠をうめくまく
けむ

いそとみ穂茎さん字枕

い信がよ告て云内えよ大顛和尚を年時
月の初め近化ちよすよ達子の花ちよすよ
先立とうと角うちよつてうむ

梅高く知りとゆく洞くわ

宿杜國子

かすみよもゆりく蝶の形えす

すゑ相承子う許よ有て今やあつまよつんとすま、

牡丹薬院くらむちやの名あひ

甲斐の園山あやし立よ

わきめのまよあくましやくうる

御月のま夜よゆう様うつねは

えみいぢく風をとつまひ

麻鳥記行

治の貞室治度の浦乃は尼よゆきく松陰や
日はこめお中消えと云ひねまのむつむ
なつうさまけ秋かまの山月さんと
かりひ立東らくはよ人ぬう治室は士
じとう一人ひきみの信傳ハ鳥はそくすは
墨は夜よ三夜の寝を被すサクナ玉山の
音像をつぶらひ入り候よ省庵山桜枝
いきあしてこの内の園もそぞりのかづら

つちよ独かして出ぬ今ひとくは傍かあへ
傍かあへるを風のすよをかうやうう
多かき鳥すわざつてつとく船ふ家て
せし徳と御前よしも船をよぶひまむねば
細き縫の力をたれんとかちとうそゆ甲斐の
因より行ひ人の舟をさる振りてつゝと
笠をかのいだまひくやくとすとすとすと
されかまうひの糸くふ不度モ桂育卷匂の
一み里とくや日もけりよるくとくとく船波山

もうよまニ寧かひもくかのりうよ
双坂の津あつとある、庵山の一隅あ
雪やまもとくの船波山
と詠く、あつ人嵐雪うらこすとあら山
日本武道のえ葉をほづく連する人の
げめうなづけうれすくあくへくは
くくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくく
あらもうの長波よ折入く船のつふりくせ

ありの風流ゆかしくあらかうやすとかる
うや尾もみきりひそきに康めつまし
そぞりいとゑあり雪の霜の都よりある
まよゑと日版よきうち利根川の水と
ぬまとえよつて此川を越の綱代とゆ
とえをまよひまよ江の市よひまよひまよ
育の程よの溪あよ入よ体よおの宿あまよ
内月温かく晴今る候よお車よ小よ
廉為よもよ至よる所志むすよ津よ月えよ

アモアシヒサヨ板車の先は和尚をさせ
せのれ此あよかくしるといをまでまよ
人をよね頗る人よとて御前をアシヤシ
日等よきと申す清淨のんをうみほ
うり行つておきいさう晴らるを和尚記
あくろりゆきひく起ぬはの先りあのる
まよゑあらりうきのとものよもてつよ
えまよゑあらりうきのと日本すある甲斐ある
えをわいふきわざあれかの行うの女す

はるかに見ゆるて、うえのまへ

上
同
一
事
中
有
人
不
能
自
由
行
事
者
也

the first time I ever
met him. He was
a tall, thin man,
with a very pale
face, and his hair
was very long and
thin. He had a
very kind and gentle
manner, and I
soon became fond
of him. He was
a very good
man, and I
will always
remember him
with fondness.

津生涯のをくまなす行は、往て放擲
せん車をかりひあみ、すんて人よゑん
とくかうこり是非胸中よそかくも是るよ
身安らひ志はく身を立んとむれども
是うまくまつて破きゆるよお能よゑいふ
してたゞ此一筋よ繋る西行の和奇よあけむ
家底の遠奇よけち舟う津よたゞ利
体うえよおけち舟通すりめへへたす
ある風情よおくるわの造化よあくび

はるかに
かえりま
るも承
うめふよ
れ有機の
人たゞん

あり
ちのた
くらい
ますに
月も
和也

日暮にすらあめとれたり
松も

かみのくに
ケンサツ
ゆめのたま
やるのみのくに
のせんのくに

卷之三

えくす木のこやか停席のこゑ う

田
家
の
事
業
は
や
せ
し
く
人
材
を
育
成
す
る
方
法
を
考
え
て
み
ま
し
ま
せ
。

王家

青
川
之
水
也
其
水
之
源
出
於
西
山
之
北

てにむかひておひる月日

まくらへす月がれソラ

めめ

よのむかへす月がれやゆふの秋ねまく
やふのじまくのさうのあは

きくわくやアニヤリ晴扇のこえソラ

野

すもよ一月のまきそ

ソラ

やくわくやくじつ

松まき

田家

うりかほくすくわくやくの秋
うりに我アドモミシテの月をみ
おのやくすくすく月をみ
よもで月ほくよをみ

李

月河月隼にしをト

サヤよわくらす月おもすか
あよひくすくすくおの秋日く
月くすくすく月くすくすく

ソラ

前立卯仲秋

おまの奇ひよもかえつゝことじふ
まかよしに荷擔の人をほんとう

田 代

manitomariyatai ten
manitomariyatai ten

manitomariyatai ten

manitomariyatai ten

流年を涯のくはるを河はは清て放擲
せん車をかりしあはせ、まんぐいほくへん
とくやう是非胸中よきかがはきつるよ
身安らむあはく身を立んことを新(とも
是うそかよこつて)破(き)放(す)を能(め)る
してたゞ一筋よ繋(つな)ぎ西行(にしゆう)の和(わ)
家(いえ)の連(つづ)きあるを舟(ふな)う渡(わた)り利(り)
体(たい)の差(さ)むけむき雲(くも)通(つう)すりせばへうす
志(し)も風(かぜ)よおくるの遠(とお)化(か)むひと

庚午紀行

百骸九竅の中よぬあひ候よ名はて風狂
坊ふ云誠ようよめが風よすまやすらん
事をりよやあんとねむねくとぬ事々

済年生涯の多くは行はば往て放擲
せん車をかりひあはへまんて人よぐん
とくをう是非胸中よそかかへ是うるよ
身安らは志はへく身を立んことを就くも
是うそゆきつゝ破くも諒よ云能せ無く
してたゞ一筋よ繋る西行の和音よおけ
家旅の遠音よおけも舟う音よれり利
体の葉よおけも雲通すりせひへなう
志す風音よおけの遠化よおけひへ

西附を生とするふもよなひといふ
ありて西月すあくまといふとれし像花すあ
さか附ハ夫竹よひしむ花すらはる附ハ
多歎す教す夫竹を生多歎を聲もて造化
をさうひ造化ふかえきとめ

神元月の初定めふきけミ月ハ風
葉のり木をさきむせし
旗人とも名よみかん御す
まき山葉もを篇

石株の往長吉布と云ひ紙を付く三角す
よかく冥送すもんともす
はいきよめをさん振りつ
此句へお詫び下りておもとゆくとめ
むけの初とて四友歌味つ人おほい詩
文まともて詠ひ成へま鉢の料を包て志を
呂すうち三月の種を集め力を入に底布
あすかくよの帽をあまつせうのまづ
ふくよ送りつみてあるのま若といと

すむれりうる小舟を浮へ列樹すまうけ
萬葉よ酒肴携あくめり木を役一石舟を
かきふとすりて山へある人の道途す
すも仰うといわぬうく是くられけ

柳葉の日記とよひ紀或を附行佛の尼の
文ぬうひ情をそぞう余の皆傍似うひ
そそり禮相を改むて行ノシテまく浅智
短才の筆足りてあはれ主ひる傳宣
より晴てそふねかくふ何より川流

たゞふとつ事あれくもよつて是れと
萬葉種新のむひよあらひ事車なうき
されともまぶくの風京人よ涉く山絶野
亭のうすれ然も見ハ歌の音とあら風きの
たうともよひきてわすれぬかく歌や
えやくお集め侍多を醉みの、燈籠よひと
くくわる人の謹みするこひよえうく
くまく之處とよ

呟あよとあうて

年時の事と見えよとて嘆かむ

花多井 稲葉とひは宿よとくちとをうひてお
もきく鳴あくひるをと満をゆよてく
とゆきみちと自うせきひく候うける
よし成かくさふ

京までがまくよそやうちのを

之河の國保美とおふよ社國う志のひてり
けを訪へんとまつ試へよ消息しと鳴あ
よりぬきふ二十三日尋うて子安吉田よひ

主なれと二人麻うあす未申
あすの運を田の中小細度を問うてよる
風いじらじとある

冬の日やる上よあくはけめ

保美村より伊豆子房へ一里半も有て之河
の木が生つてきよと伊勢といはれてたる不
るともいふる山へよう万紫千紅の伊勢の
名石のうちよ投入されありけらるゝ巻
石を拾ふせふゝは白とよとくの背山と云

彦をあらかず南のあひ果ふく彦のば
やくはるふとせりよし、彦かと奇ふもゆり
名とらむ松氣も折す

彦一つ足すもあればゆく

熟田馬修後

彦をすえじまちのむ

蓬のくよもひとわらば休息
すみかと

筑根越人むきにひきのき

人行人の乞
首のたれす雪見よまゆ波市
いさりんをえよまゆ不まく
ある人の舟

彦をすえ構ふ巣石を引ひる

けろ萬能大坂波阜のすきりひとひまく
奇仙あるへつおかと彦よみひあき十日余
名古尼を出そ田里に入んと

猿病そぞくは世の様拂

某名よりくもくまぬきと云日承り里より
馬かくそ杖つゝ坂上とて行鶴うちうな
くるよう爲め

あがかくは杖つゝ坂上とて行鶴うちうな
ともめうなはあまく立止仰れい酒すすまを、

旧里や歎り泣よあくとくの音
育のとくをの名ゆせまんと酒のこあす
える無事すれあま

二日もぬうへきふ花のま

初春

春立ても九日の卯山ふね

桔芝やす、けうみの一二才

伊勢の国阿波の店とよす後宗上人の田路
あり後峰と新大佛もとくやいふ名中ひふ事
のせんじゆかと伽藍ハ破壁と壁をあら坊舍ハ
破壁と田舎と名のやう丈六の塔像ハ若の御よ
ばくかくのこ紙あら拂とさせうよ聖人の

お前は早く全くあくまで宿を代わ
名残えさすがく涙こなづけの石め
まで臺を移みのせなと、蓮座の上に堆双林の
樹の路がまのうつむき是てまこと

丈たよゆをまく 石は上

うゑの事ひひ出す樹うね

伊勢山田

何のあはむともかく白い
裸よ、また衣ふる所

菩提山

山の心を告よ枝を姫
旅尚舎

おの名を先よ芦の若葉うね
酒代民歌を當よ今

樹のあよ行すうめや樹のむ

学房の舎

いも極てつハ葎のう葉うね

神垣めうちも樹一本もがいよか有事

あやと神召をよみのむとハ只行ふが
かの月の梅一枝ともふくらす衣紋のみ
一もとゆるよりを詠傳す

かの月の一日の山の樹のむ

神坂やさひもうけのほんじ
やよしまたがとそろようきさんひの花のふと
左門ねぢともうとすけのもよびひさんと
すよかのいとほりそめう事へ人の仲家
ゆき出向ひとも小猿の氣れをえ旦ハ承
笠のうちよ落出す

まちふまよとおもきのたまつゆひもんと
自万葉丸と名をよ海よまうき名のちる
いと風かういてやつ生めあひじれ事せんと
笠のうちよ落出す

乾坤無住同行二人

す豊多木橘不きを捨て笠

万葉丸

猿の具多木いとばさうことぬ皆拂接され
もあう料もとかこた一つ合羽すうのもは

取手底葉は毛の有る
脊員またいともよもや
さくよひうつすみをな様すまほたるもの

卷之三

まへやめり人中夜その渴
是法も傳承の有る花道也

卷之三

足利義滿
信光
元和
元年

是故之傳也今之花也

松風の花より
ゆきの香の氣

三編
多武峰

三輪多喜峰

卷之三

童の衣や上戸のち産よせん
酒をよ渡さんからほの花

西江

かのよと山のちるはれのう

物語

布ぬのあい布ぬのあい二十み丁山のあい
津のむ寂田の門上す有

布羽宿 ちわまゐの所
猪尾寺 猪の尾す有

内々猪三とや日よか室六室
日ひもよ多そそりやらすが
扇を酒くしきけやちるそく
苔溝多とぞ一中せせ

まものこしゆつとほりがはうのふ
よ聖の花よこ日此とぞ喫苦の氣色す
じく人有段のほ氣あがりさんと今とあ
狗よえちとゆと振幸そりあくわすうそと
あけのあはまよまよひかの真室う量ハ
とうちかくもうちかくもんえ葉もあくと
うつよ口そとちかくいと口そとらひえくの
匂いあくねれとも家よううてお身事
あ

高野

父母のあむよし
能のち
ちらるよたよと
奥の院
万葉

和音の庵

りよよ和音の庵

まみ井

流はすれど西河よひくとおの後しを
ありひるがく附、いきや雲は事もろよ
うかよ山此浦濱の美京よ造化の功をえ成ハ

安徳の尼老の歌よすまの風情の人のみをう
かふね極極をよしと窓わの歌ひかくとくわあれ
途中の松すか一寛あ響ようへ喰合肉よも
まことあるべきよかきよかくとてまむ野よ時
かく只一日の歌ひ二つの今宵よき有りん
掌鏡の歌よよくとおりんとおりんとくといふ
さうよらひあく歌くまき持日よ情を
あくもりつよ風情あるくよ生ゑくよ
歌うれうき一日は古めくかくらふくよ

あこねるやうの人の道土の匂つよかく
らひはあよ岸のうちで一人かゝるかとて
まつり玉を拾ひ泥中は金をぬるんじ
まゆす書け人よほんとせりとまく是
施主の一つなりう

夜更

一ウぬひくほよ風ぬ夜之

芳生布子考へ衣え 万葉

灌佛の日、奈良まで安て詣候ふ、康乃

子を産き名け由よおゆきをうなが
灌仏の日よ生れ會へ康乃

招提も禮志也高木村の船中七十余度の
移き左のさきは六月のうち後以風入て涼よ

涼用育させよと像を洋

考案して六月の事ゆくや

四左よおゆくよく

麻の角も一筋の列もくわ

大坂山成人のりくわ

杜の邊を抜のいとひう。

湊 康

日あれどもあせじほのる
月えどりのたゞいはや波テの妻
舟月中旬のともも候よあてそくかと經水の
月ねども船あらよ山の草葉ようにかづく
波多吹きりてもあはれともあのくよくあく
そめくふ上井と是くすれあいまう徳浪りくみ
あひく漁人すれをく斧子のもはくよ
君波とあ
侍士の前先とくさや斧子のと
東源庵の波ア波源アと云ふよつて
あなうらふ行進をするともス波源波くねて
かと寄めりあん候も今ハかく業するも
足ア波源アと云ふ奥を潤して兵砂りうつよ
千ちうへんを鳥の丸までつゝち、水を
ぬくそらりとあとすそ侍士のわざとむしの
ち古战场の名あととくわくほくとくあす

かやといと見るにむかひの志へんまふて
えひう峰よりそんとする。すすり子のくわ
うまでとかくひまくひすをゑる。よもじ
て棒の薬店よりおもすくさかとひら
くるふき脚よりそくさかとひらん
里の幸子よりひりゆかとひらんと松前
丈の先きと。羊脇信頼の若根をもと
喜びへとて爲めつゝとけちくひこひく
つ一根無よたつて鳥をえり汗をもじて

御まつよ入るひりふと余ばかり力あ

今

おおはりの侍の先よ唱うけむ
おとよよ消りゆくやあひと

おおはりよふみ箆すふ下写

西石太治

皆盡やもうおき差をまづ月

かる秋の林もう今とてやけ唐の実を松をひよ
とすれぬ。かういふてこんづかく秋

かうと仰せりとすよど生（さねをとさよ
そおん度の持主をあくぬよ以て）達政翁
おふえすにそぞ活（アハ）のあわたすよ
つうる吳楚東海の海もうもおひやねあら
人の不候（ハサウ）の候わもおひやねあら
かう又後の方よ山を隔て田井の細（とせ
お松原（モミノハラ）の尾よ浅（ハサ）
波源（モミノハラ）有沫伏（モミノハラ）逆流（モミノハラ）
うき名（モミノハラ）を並んで邊掛（モミノハラ）下すよ
モミノハラ

一、谷内書局（ハセリト）より少（シテ）代り候（ハセリト）
のまことさゆる（ハセリト）はうひ付（モミノハラ）二位の尼君
皇子（モミノハラ）を抱（モミノハラ）女院（モミノハラ）の本堂（モミノハラ）
よすうひ人（モミノハラ）をすむ（モミノハラ）内侍（モミノハラ）女房（モミノハラ）
のめい（モミノハラ）の内侍（モミノハラ）を（モミノハラ）抱（モミノハラ）
んとあく（モミノハラ）を（モミノハラ）抱（モミノハラ）
そそ（モミノハラ）舟（モミノハラ）と（モミノハラ）船（モミノハラ）が（モミノハラ）抱（モミノハラ）
ぬ（モミノハラ）舟（モミノハラ）の舟（モミノハラ）と（モミノハラ）舟（モミノハラ）が（モミノハラ）抱（モミノハラ）

更科記行

けりぬの里かほら山のほんと頻よきる
秋風のむすめをもれどともぬきのまをく
もすまは又もとう試人とみ本音ひし原く
なさうく孫麻の力もんりくとあこすう
奴僕をて送へすやく今くまよと
とも旅宿のまゆのぬさぬぞとふるあふ
あとのあとよなにせんかもあくよおき
とよきとよくとよふとよふとよふとよふ

きのう宿かりまわりあひた
ひつとちりう鶴たじまとあひひ鳥
せう足ハまくじきよおりあねを体
今人の行くれうをあく肩よみくらぬ
よかの傷ひぬものもとくよがみく
よつてもふをそりうよせすまよお岐
のよよお日ひもうてたはたれあき岸下
草のさむをあくそれもまくらふくふ、船の
上岸あく只あやうとがのさじとむる

桜森景元と云ふ者、猿の子たち岸などへ
四十ハ曲くらや九十九度も變化するといふ化
せるありようやくものと、昭うるをうる。
おほき足定ましかつて、僕いともそそ
そりけりとて、はるの上あく只あくよ時て
彦ねづみ事、行まくあくらをぬよえとて
あやうきとほり、佛のあくよ處そのうれ
世をえきすかることあくと、身度迅速のこそ
トまかふよかつて、これで阿波の鳴戸、

波風あるうまぐ、おひまの船波おて、豆のうち
おりひ没けるまもむすび捨てぬ匂ふと
身立たず出でけのれと、服をともひくじて
うめき伏せ、たひり坊搖籃の右うくのれの
ぬあうこゑたる北に、深泥の草を殺す
己うちや一とひても吹くつうと、風情の
さうとめて、何を云ふこともほんせすまされ
あら日影のむの彼とよう、おのほれよすいで

引抜の音 康きよすゑ よまくら 連よしみ
しも秋のん 室よそをういてや日めのりすよ
ぬ振せんといえ、延ね生うよおつよー下
くうもあはまよそえをふつうがひきあひ
あく都の人へうふきほひ風情かくとも
きよみれうらうよひひうけぬ無よ入る
膳碗玉庵のん比せうもふくあ
うのゆよ延ねて、眉の月
の核やいのもとくもまうく

核や先せひけるもえ
房晴て核ハ目ひまくねは 越人

姓 楠

付や姓ひとづ 法日の支
いさよしもさくばくふの歌うふ
文种やこあきの月えもむは
えとうくと種あくよや女良む
者すみて大根えり 松の月
本音の筋字せり人おまけに

送りもの到着の果、お詫び申
旨先手

日影やこの四宗も只ひとう
いをすくは、間の豊かが

わざあわづて御五ごとま
はるかに、

音事事、實にさうあれ
めのうれしきのむかへ

